高山の文化を高めた人々〈8〉

大正昭和に輝いた　長尾量平氏を偲ぶ

江黒亮一

畏敬の友、今は亡き長尾量平氏を、高山の歴史上の文化人として偲ぶことは何ともやりきれない思いであるが、彼を識る者として、彼の文化活動を確と伝えることは、遺された者として大切な役割と思う。

昭和三年斐太中学を卒業して家業長尾小間物店を継ぎ、高山に定住したことが彼の郷土に於ける文化活動の大きな要因で、その主な文化活動は、

昭和八年二月（一九三三）、高山音楽連盟創立に参画、以後副会長となって昭和三十年まで続く。

昭和十三年五月（一九三八）毎日新聞高山通信部員となる。

昭和二十五年五月（一九五〇）毎日新聞萩原通信部主任を依頼退職。

昭和二十五年七月（一九五〇）劇団路踏志座副会長となる。

昭和二十五年十月（一九五〇）「高山市の歌」作曲入選する。

昭和二十八年九月（一九五三）高山たばこ販売組合理事長となる。

昭和三十年七月（一九五五）文化鑑賞会「フェニックス」創立、常任理事となる。

昭和三十三年五月（一九五八）高山市文化協会副会長となる。

昭和四十三年五月（一九六八）高山市文化協会会長に推挙される。

昭和四十八年五月（一九七三）高山市史編纂委員に委嘱される。

昭和四十八年十一月（一九七三）高山ロータリークラブから多年の音楽文化活動に対する表彰を受ける。

彼はまたペンネームを、デザイン関係には素玄坊芸社、音楽関係には野津保、随筆エッセイにはながをりょうへい・又艶本好平、川柳には細井音子を使うなど、多芸多才であった。手許にある長尾さんから贈られた著書は、

高山たばこ組合六十年史上下（昭和四十四年八月刊行）

広告高山史（昭和四十六年十二月）

芸社二十五周年記念志芽出し帖（昭和四十九年七月）

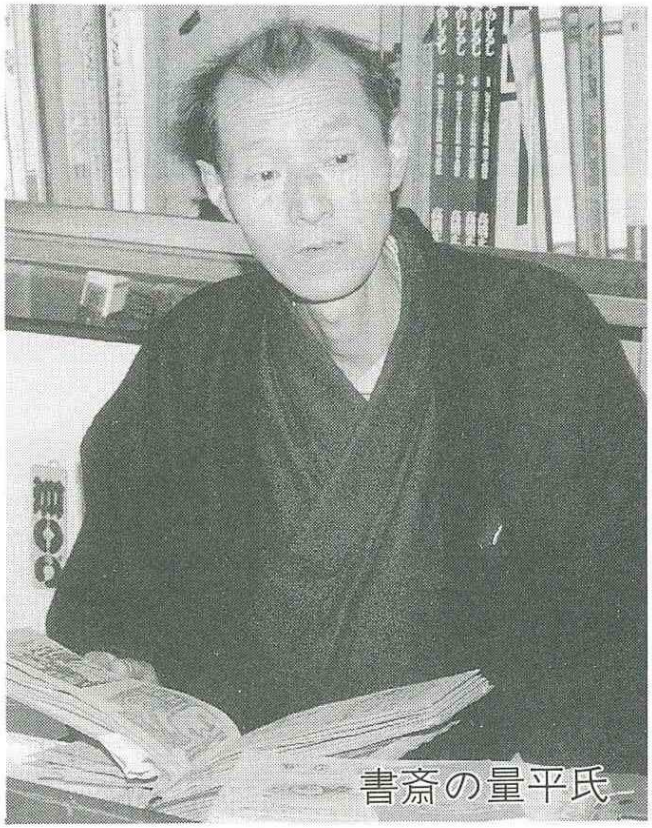
琴高台組諸事記（昭和五十二年）

明治大正俗聞史（昭和五十三年十月）

右の中、高山たばこ組合史の外はすべて限定自費出版の貴重な作。一枚のチラシ広告が時代を反映、地元新聞の変遷と世相風俗史、芸社志芽出し帖は、趣味の年賀状交換会を始めて二十五周年記念に長尾氏手造り和綴八十部限定の凝った作である。どの本も題字装丁すべて長尾氏の創意工夫のもの、造詣の深さ、多芸多才な行動力、いく度か病に臥しながら強靱な意欲と実行力は敬服の外はない。また武井武雄画伯の私家版限定の稀覯豆本の愛蔵者でもあった。

長尾氏は公職の肩書をもたない野人で、自らはバイオリンを、そしてギター、アコーディオンを奏でる音楽好きであった。

細身を和服に包み、前掛けのポケットにはいつもメモ帖と糊、鋏を用意した姿が浮かんでくる。芸社年賀状交換会は、既に半世紀余、日本でも唯一の歴史をもったユニークな会として、今も高山発信、全国に同趣同好の人達六十余名が、長尾氏の余韻を楽しんでいる。亡き畏友長尾量平さんは、大正昭和の高山に輝いた真の文化人である。



書斎の量平氏